

# 令和7年度 自己評価計画書

石川県立小松明峰高等学校

(No.1)

重点目標	具体的取組	主担当	現 状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定基準	備考
(1) 主体的に学び続ける力を身につけさせ、生徒個々に応じた進路実現を目指す。	① 生徒による授業評価や教職員相互の授業参観、研究授業等の取組を通して、授業改善を進めて学力向上につなげる。	教務課	令和6年度後期の生徒アンケートで「授業を通じて学力がついてきている」の項目で「当てはまる」「ほぼ当てはまる」と回答した生徒の割合は93.7%であった。	「満足度指標」 不断の授業改善により、生徒の学力を高め、生徒自身が「学力がついてきている」と実感する生徒が増加する。	生徒アンケートの「私は授業を通じて学力（知識・技能、思考力・判断力・表現力）がついてきている」の項目に対し「当てはまる」「ほぼ当てはまる」と回答した生徒の割合が  A：95%以上 B：90%以上 C：85%以上 D：85%未満	C、Dの場合は、改善策を検討する。	アンケート調査を実施
	② 「予習→授業→復習」の学習サイクルの確立を促して、家庭学習の充実を図る。	教務課 各学年	令和6年度後期の生徒アンケートの「私は予習や復習をして授業に臨んでいる（国数英3教科）」という質問に「当てはまる」「ほぼ当てはまる」と回答した生徒の割合は65.5%であった。	「成果指標」 家庭学習が習慣化し、予習・復習にしっかりと取り組んでいる生徒が増加する。	生徒アンケートの「私は予習や復習をして授業に臨んでいる（国数英3教科）」の項目に対し「当てはまる」「ほぼ当てはまる」と回答した生徒の割合が  A：70%以上 B：60%以上 C：50%以上 D：50%未満	C、Dの場合は、改善策を検討する。	アンケート調査を実施
	③ 授業の中で生徒が思考する時間を確保し、ICTを活用して、生徒個々の学びの質を高め、資質・能力の育成を図る。	教務課	令和6年度後期の生徒アンケートの「ICTを積極的・効果的に活用している」という質問に「当てはまる」「ほぼ当てはまる」と回答した生徒の割合は62.7%であった。	「努力指標」 ICTを積極的・効果的に活用する教員が増加することで、生徒も積極的・効果的に活用する生徒が増加する。	生徒アンケートの「ICTを積極的・効果的に活用している」の項目に対し「当てはまる」「ほぼ当てはまる」と回答した生徒の割合が  A：70%以上 B：60%以上 C：50%以上 D：50%未満	C、Dの場合は、改善策を検討する。	アンケート調査を実施
	④ 生徒一人ひとりの進路実現を目指す指導の充実を図るなかで、難関国公立大学や金沢・富山・福井大学を含めた国公立大学への合格率を高める。	進路指導課	令和7年度大学入試では国公立大学の合格者数は102人で、うち難関大学3人、金沢大学11人、富山大学23人、福井大学5人であった。	「成果指標」 国公立大学の合格者数または難関大学・金沢大学・富山大学・福井大学の合格者数が増加する。	国公立大学の合格者数が  A：110人以上 B：100人以上 C：90人以上 D：90人未満	C、Dの場合は、改善策を検討する。	

# 令和7年度 自己評価計画書

石川県立小松明峰高等学校

(No.2)

重点目標	具体的取組	主担当	現 状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定基準	備考
(2) 学業と部活動の両立を目指し、生徒の主体性を育み、自己肯定感を高める。	① 文武両道を推進するなかで、各部が年度当初に立てた高みを目指す目標を達成するよう努力する。	生徒課	令和6年度後期の生徒アンケートの「学習と部・同好会の活動が両立するよう努力している」の項目で「当てはまる」「ほぼ当てはまる」と回答した生徒の割合は、81.9%であった。	「努力指標」 生徒が文武両道を推進するために効率的かつ効果的に活動できるように工夫している。	生徒アンケートの「学習と部・同好会の活動が両立するよう努力している」の項目で「当てはまる」「ほぼ当てはまる」と回答した生徒の割合が  A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：60%未満	C、Dの場合は、改善策を検討する。	アンケート調査を実施
	② 生徒が自主的に学校行事や部活動等に取り組むことができるよう、生徒主体の運営を進める。	生徒課	令和6年度後期の生徒アンケートの「部活動や学校行事に積極的に取り組んでいる」の項目で「当てはまる」と回答した生徒は91.6%であった。	「満足度指標」 学校行事や部活動に積極的に取り組む生徒の割合を増やす。	生徒アンケートの「学校行事や部活動に積極的に取り組んでいる」の項目に対し「当てはまる」「ほぼ当てはまる」と回答した生徒の割合が  A：95%以上 B：90%以上 C：85%以上 D：85%未満	C、Dの場合は、改善策を検討する。	アンケート調査を実施
	③ 生徒が自主的・積極的に挨拶をおこなうよう、教員が雰囲気づくりに努める。	生徒課	令和6年度後期の生徒アンケートの「あなたは校舎内で自発的に挨拶をしていますか」の項目で、「当てはまる」「ほぼ当てはまる」と回答した生徒の割合は86.2%であった。	「成果指標」 指導により積極的に挨拶ができる生徒の割合を増やす。	生徒アンケートの「あなたは校舎内で自発的に挨拶をしていますか」の項目に対し「当てはまる」「ほぼ当てはまる」と回答した生徒の割合が  A：90%以上 B：80%以上 C：70%以上 D：70%未満	C、Dの場合は、取組を見直し改善する。	アンケート調査を実施

# 令和7年度 自己評価計画書

石川県立小松明峰高等学校

(No.3)

重点目標	具体的取組	主担当	現 状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定基準	備考
(3) 地域に根ざした活動や学校情報の発信に努め、保護者や地域に信頼され、必要とされる学校づくりを推進する。	① いじめ防止基本方針に基づき、全職員の共通理解の下、いじめの未然防止や対応に取り組んでいる。	生徒課	令和6年度後期の教員アンケートではいじめ事案の早期発見・早期対応に努めていると回答した教員は100.0%であった。朝の登校指導やST、授業等で生徒の表情等を確認し、意見交換して異状の発見に努めている。	「努力指標」 いじめの未然防止を基本に、早期発見・早期対応を心掛けている教員の割合が増加する。	教員アンケートの「いじめの未然防止を基本に、早期発見・早期対応を心掛けている」の項目に対し「当てはまる」「ほぼ当てはまる」と回答した教員の割合が  A：100% B：95%以上 C：90%以上 D：90%未満	C、Dの場合は、取組を見直し改善する。	アンケート調査を実施
	② 学校教育に対する地域の理解を得るため、校内外において、ボランティア活動の機会を広報・推奨する。	生徒課	令和6年度後期のアンケート調査でボランティア活動に参加したことがあると回答した生徒は48.3%であった。生徒に地域の活動だけではなく、校内の諸活動も含め、生徒が主体的に活動するようにしている。	「努力指標」 ボランティア活動に参加する生徒の割合を増やし、地域社会・学校の一員であるという意識を高める。	ボランティア活動に参加したことがあると回答した生徒の割合が  A：60%以上 B：50%以上 C：40%以上 D：40%未満	C、Dの場合は、取組を見直し改善する。	アンケート調査を実施
	③ ホームページで本校の特色や教育活動の様子をタイムリーに発信するとともに、情報の速やかな更新とわかりやすいページ構成に努める。またClassiを活用して必要な情報を遅延なく提供する。	総務課  企画情報課	令和6年度のアンケートにおいて学校の情報発信に対して満足している保護者の割合は88.6%であった。引き続き、災害や気象に関連する緊急連絡をはじめ、学校のあらゆる活動の情報発信に努める。	「満足度指標」 学校の様々な情報発信に対して満足する保護者が増加する。	学校の情報発信に対して、「満足している」「ほぼ満足している」と答えた保護者の割合が  A：90%以上 B：80%以上 C：70%以上 D：70%未満	C、Dの場合は、取組を見直し改善する。	アンケート調査を実施
(4) 防災への備えを講じるとともに、自然災害等に対する危機管理意識を高め、緊急時に適切に対応できる体制を構築する。	① 学期に1回以上防災教育活動を実施し、災害対応力の強化を図る。	全職員	昨年度は年2回の避難訓練のみの取り組みであったが、より実践的な訓練や防災学習を充実させることで、防災に関する意識や能力を高める必要がある。	「努力指標」 実践的な訓練や防災学習を充実させることで防災に関する指導に努める。	防災学習において生徒に効果的な指導ができた教員の割合が  A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：50%未満	C、Dの場合は、取組を見直し改善する。	アンケート調査を実施

# 令和 7 年度 自己評価計画書

石川県立小松明峰高等学校

(No. 4)

重点目標	具体的取組		主担当	現 状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定基準	備考
(5) 学校業務の効率化を図り、高い専門的知識とスキルに基づいた協働的な教育活動を実践する。	①	教材の共有による授業準備の効率化、各種会議の縮減、業務の平準化等の取組により、生徒と向き合う時間を十分に確保する。	教 頭	令和 6 年度の後期教員アンケートで「教材研究・授業準備や生徒と向き合う時間を十分に確保しつつ、これまでの働き方を見直すことができた」と回答した教職員の割合は 76.6%であった。	「満足度指標」限られた時間の中で、教材研究・授業準備や生徒と向き合う時間を十分に確保しつつ、これまでの働き方を見直す教職員が増加する。	教員アンケートの「教材研究・授業準備や生徒と向き合う時間を十分に確保しつつ、これまでの働き方を見直すことができたと感じる」の項目に対し「当てはまる」と回答した教職員の割合が  A : 80%以上 B : 70%以上 C : 60%以上 D : 60%未満	C、D の場合は、改善策を検討する。	アンケート調査を実施